役員エッセイ

大通公園を望む窓辺から

競馬の魅力

副会長　佐古（さこ）　和廣（かずひろ）

いまテレビで「ザ・ロイヤルファミリー」という競馬をテーマとした番組が放送されています。競走馬が誕生してからレースに出走するまでの過程や、血統に込められた歴史などが描かれており、競馬に馴染みのない方にもその魅力が伝わっているのではないかと思います。

私自身、学生時代から競馬に関心を持っていました（当時は、学生は20歳を過ぎても馬券を購入することができませんでした）。妻と出会ったころ、「競馬をする」と話したところ、大変驚かれギャンブラーのように思われたようでした。競馬はスポーツなのかギャンブルなのか。日本では後者と捉える方が多いのかと想像します。

競馬の魅力は、レースのわずか２分間ほどの緊張と興奮ですが、真の醍醐味は「予想」にあると思っています。競馬の予想は、いわば多変量解析であり、血統、距離、馬場状態、枠順、騎手などの要素にどのような重み付けをするかが重要です。実益を伴うことはほとんどありませんが、これほど知的で奥深い“観るスポーツ”は他にないと思います。

歴代の人気馬の中には、ハイセイコーやオグリキャップといった名馬がいます。この２頭に共通するのは、血統的に特別優れていたわけではなく、いずれも地方競馬出身という「たたき上げ」であったことです。地方から中央へと挑戦し、懸命に走るその姿に、自らの人生を重ね合わせた人も少なくなかったのではないかと想像します。

競馬は「ロマン」であるとも言われます。1970年代、寺山修司氏は『報知新聞』に競馬予想のコラムを連載していました。「すし屋の政」や「バーテンの万田」といったおそらく創作上の人物たちが、日常の会話を交えながら勝ち馬を予想という独特のスタイルでした。予想はほとんど当たらないのですが、読み物としては大変面白かったのを記憶しています。そこには、寺山作品に通底する“敗者の美学”が息づいていたからかもしれません。

―エジプト旅行記―

常任理事　青木（あおき）　秀俊（ひでとし）

エジプト旅行をしたくて２年位前より計画した。個人旅行するパワーはなくなったが、どうせなら２週間くらいのツアーを探していたところ、ドイツ在住の知人から１年前予約なら安いドイツ発着のツアーがあると言われ、20人のドイツ人ツアーに紛れ込んだ。

７月下旬ドイツからカイロに飛び、ピラミッド等の市内観光、次にナイル川クルーズ船でゆったりと観光、最後は紅海に面したフルガダで休養後フランクフルトに戻った（計14日間）。

エジプトは人口１億人を超え、国土の95％以上が砂漠であり、カイロは人口密度の高い都市のひとつである。人口は近年急速に増大し、とくに若年層が非常に多い。夏の日中気温は40～50℃で、降雨はわずか。一人当たりのGDPは低く、中東や北アフリカ諸国の中でも低水準である。エジプトには、バクシーシという「お金のある者が貧しい者に施しを与える」文化があり、観光客は「持つ者」と見なされ、何かしてもらったらチップを渡すのが当たり前とされる風潮がある。治安は決して安全といえず希にテロ事件の発生もみられ、我々のツアーバスにも多分銃器を携帯したセキュリティー・ガードが必ず同乗した。

エジプトは世界３大ウザい国の一つと言われており、今回の経験から述べてみたい。①水道水を飲めない（歯磨きのうがい、サラダ・カット果物等、人によりひどい下痢あり）②とにかく暑い（夏季は避けるべし）③しつこい客引き、物売り④チップ文化、半ば強制的⑤詐欺・ぼったくり⑥信号機が無く、道路横断が命がけ⑦食事がまずい⑧禁酒、酒販売なし⑨女性は外では働かない⑩遺跡は広大で観光には脚力を要す　等々

しかしエジプトの多くの人たちは、優しく、日本人に友好的で、毎日をエネルギッシュに生きており、世界有数の遺跡は言うまでもなく素晴らしく、ぜひ日本の若い人たちに訪れてほしい国である。